

【響き】というあいまいなことば

ことわざにも「打てば響く」というのがあり、日常会話にも「さわやかな響き」とか「表を車が通るとガラス戸が響く」とか「成績に響く」等の使い方がありますが、文科省の旧学習指導要領でも音楽科に限らず国語科でも【言葉の響きに関心をもつこと】というような使いかたをしており音楽科では【伴奏の響きを聴いて演奏すること】、【音の重なりや和声の響きを味わって合唱や合奏をすること】、【発音及び呼吸の仕方に気を付けて、豊かな響きの頭声的発声で歌うこと】、【音や声の重なりによる響きを味わって聴くこと】、【音色や音の響きなどの特色を感じ取り】、【音の重なりや和声の響きを味わって合唱や合奏をすること】等の言葉が見受けられます。

そもそも響きという言葉の辞書的意味は

ひびき【響き】

ひびくこと・音。 音の感じ。音色。(英) sound

ひびきわたる【響き渡る】

{動詞} 鳴りわたる。(評判などが) 広く伝わる。

ひびく【響く】

{動詞} 音があたりに広がる。 振動が伝わる。 影響する。 評判になる。 心に感じる。(英) sound

というような説明ですが、「共鳴」というようなニュアンスも「人の考えや行動に、同感すること。 他の振動体の作用を受け、それと同じ振動数で振動すること。共振。」で響きとよく似た使われ方をしています。学習指導要領(平成10年)では次のようです。

- ・互いの歌声や楽器の音、伴奏の響きを聴いて演奏すること。
- ・即興的に音を選んで表現し、いろいろな音の響きやその組合せを楽しむこと。
- ・音の重なりや和声の響きに重点を置いた活動を通して、基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。
- ・拍の流れやフレーズ、音の重なりや和声の響きを感じ取って、演奏したり身体表現をしたりすること。
- ・呼吸及び発音の仕方を工夫して、豊かな響きのある、自然で無理のない声で歌うこと。
- ・楽器の音色及び人の声の特徴に気を付けて聴くこと。また、それらの音や声の重なりによる響きを味わって聴くこと。
- ・音楽の構成及び音や声の重なりによる響きの特徴を感じ取り、聴く喜びを深めやすい楽曲

・各学年の「A表現」の(4)に示す事項については、児童が個性的な発想を生かした表現を工夫し、様々な響きを直接経験するようにすること。また、必要に応じて記譜の指導をすること。

・声部の役割を感じ取り、全体の響きに気を付けて合唱や合奏をすること。

・声部の役割を生かし、全体の響きに調和させて合唱や合奏をすること。

上記文中の下線部分における「響き」のなんと多様なことか。結論的には【音】ではなく【響き】とした理由は【音楽的要素を含んだ音】という意味で書き記したように推察できます。そうでなければ【和声の響き】等という意味不明の日本語が分かりません。【和音の響き】という日本語は成立しますが、和声は和音の機能をさして言うのが普通で響きませんし、英語でも Chord と Harmony は厳密に区別されています。

さて、我々音楽を愛好する人間が「響き」という言葉を使うとき「結果として受け入れた音」という意味で、周囲の雑音や不必要な音を取り除いて聴きたい音だけを受け入れた状態をさすと思うのです。【ギターの響き】というときはギター以外の楽器との比較があり、【スタインウェイの響き】というときはスタインウェイ以外のピアノとの違いが意識されます。

アナログ・シンセサイザーでフィルター操作をするとき、【カットオフフリケンシー】と呼ぶ切り捨てられる周波数の設定である程度高調波の量を変えることで音色が変えられますが、【レゾナンス】と呼ぶ共鳴の設定をしてやらないと【フォルマント】すなわち母音成分が強調できなかったのです。トランペットの音が「ペー」に聞こえたり「パー」に聞こえたりするのはこのフォルマントの違いなのですが、楽器ではその材質や形状、容積などがこのレゾナンス効果を作り出しているのです。弦楽器には必ず【共鳴胴】があり、管楽器には【共鳴管】があり、それこそ【響き】を作っているのです。

電子回路が創り出す原音波形にはこの数センチ四方の空間が作り出す【余分な共鳴】がありませんから貧弱で痩せこけたそれでいて刺激の強い音になってしまいます。自然空間の複雑怪奇な【響き現象】を純粹に電子回路だけで合成する試みは今までにも色々製品化されましたが、音源となるスピーカーに様々な位相操作を加える DSP の出現でやっと実用化のめどが立ったわけですが教育現場のオーディオ装置はまだまだです。